

『怒りのぶどう』と『蒼氓』

杉 山 隆 彦

はじめに

ジョン・スタインベック（一九〇二―六八）と石川達三（一九〇五―八五）とを結びつける線はほとんど皆無と言つてよい。

石川の「蒼氓」（短編）第一稿が書かれたのは一九三二年であり、それを翌一九三三年に書き直して、雑誌『改造』の懸賞小説に応募して選外佳作となった。これに更に手を入れて、同人雑誌『星座』創刊号（一九三五年四月）に発表したのが、いわば彼の処女作であった。これが第一回芥川龍之介賞（一九三五年八月）の受賞作となったのである。この時点まで無名であった新人作家・石川の存在を、未だ無名のアメリカ作家スタインベックが知っていたという痕跡は何ひとつ無い。

大恐慌時代突入とほぼ同時に作家的出発をしたといえるスタインベックは、なるほど『黄金の杯』（一九二九）、『天の牧場』（一九三三）、『知られざる神に』（一九三三）を発表してはいたが、アメリカにおいてもまったくの無名の作家であり、ようやく一九三五年五月の『トーティヤ・フラット』刊行によって新人作家としての認知を得

たにすぎない。彼の存在が、遠く離れた日本の、これまた駆け出しの作家・石川達三の視野に入っていたとは考えられない。

スタインベックについての石川の言及は、わずかに、次のものが記録されているにすぎない。しかもそれは一九七〇年のことである。

島崎藤村のしつこさ、室生犀星のしつこさ、徳田秋声のしつこさ、そして夏目漱石のしつこさ。みんなしつこい筆をもっているが、そのしつこい場所はみんな違って思うように思われる。画家にたとえて見ても、ルノアールのしつこさとアンリ・ルツソーのしつこさと、ゴッホのしつこさとは全く別のものである。ドストイェフスキイのしつこさと、ロレンスのしつこさと、バルザックのしつこさと、スタインベックのしつこさと、みな各々の個性をもっているが、そのしつこさが彼等の作品を成功させる重要な鍵であったと思う。しつこさとは即ち作家がその主題と闘っている姿であり、主題を書き尽そうとする努力にほかならない。

(石川達三『経験的小説論』6、一九七〇)

『怒りのぶどう』と『蒼氓』が一九三九年に、太平洋をはさんでアメリカと日本でほぼ同時(前者は四月、後者は八月)に発表されたことは、以上の点から見て、文学史上の偶然以外の何物でもない。それに、スタインベック

の最高傑作である『怒りのぶどう』と石川の処女作『蒼氓』を同じ組上で比較することは、不公平であるばかりでなく、不適切ですらあるだろう。したがって小論は、両作家を比較文学の尺度―それがいかなるものであるかはさておき―で比較しようとするものではない。ただ、両作品の構成上の酷似とそこで扱われている内容の深刻さが、検討に値いすると思われるからここで取りあげてみたいと考えるのである。

1

一九三〇年代のアメリカ不況の時代に、畑の上に吹き寄せられた砂嵐（自然災害）と金融資本からの圧迫（人為災害）とによって、住み慣れた農村から追い出されたオクラホマのジョード一家二人が（説教師ジム・ケーシーを伴って）、積めるだけの家財道具と食料をおんほろぐるまに積み込んで、新しい仕事がいくらでもあるという甘い言葉に誘われて、カリフォルニア中部の農場地帯を目指して、長い旅をする。途中幾度か川沿いの難民キャンプや、急ごしらえの「失業者収容住宅地区」―当時の（第三一代）アメリカ大統領（一九二九―三三）ハーバート・フーバーの名前をとって「フーバービル」というのがたくさん造られた―での生活を余儀なくされる。やがて、目的地のカリフォルニアに着くが、着いてみると仕事は無く、たとえあつたとしても、難民の数が多すぎるために、賃金がどんどん減らされてゆく。また、大雨が降り続いて、自然環境にも悩まされる。このような苦しみの中で、ジョード一家は、途中何人かの家族を失うが、からくも生き延びてゆこうとする希望を捨てない。

『怒りのぶどう』は大長編作品で、

一、カリフォルニアの機械化された農業形態―「農業工場」とさえ名づけられた―に対する告発、

二、不況の時代の人間の悲劇、

三、その中にあつても未来を信じて挫けない、希望に溢れた人間魂・家族愛……

など、さまざまなテーマを盛り込んでいる。

そしてこの物語は、旧約聖書の『出エジプト記』を下敷きにした壮大な叙事詩となっている。また、物語最終場面の大雨の描写は、「ノアの洪水」を思わせるような仕掛けにもなっている。

同じ頃（一九三五年）発表された石川達三の「蒼氓」という（短編）作品も、世界的大恐慌の影響下に書かれた作品である。神戸の国立移民収容所に日本全国から集まってきたブラジル行きの移民たちの物語である。募集に応じて集まってきた人たちは、北は北海道から南は九州にまで及んでおり、そのほとんどが、先祖の土地を耕しながら食いつめてしまった貧農階級であつた。作者は、東北出身の佐藤・門馬一族に焦点を絞って、東北の農民の苦しい生活を浮き彫りにしている。

「故郷には傾いた家と、麦の生え揃った上を雪が降り埋めている幾段幾段の畑と、そして永い苦闘の思い出とがある。しかし、家も売つ

た畑も売つた。家財残らず人手に渡つて了つた。父と祖父と曾祖父と、

三つで死んだ子供と、四基の墓に思いつきりの供物を捧げてお別れを

して来たではないか……」（『蒼氓』第一部・「蒼氓」、冒頭部分）

長編『蒼氓』（一九三九）は、この芥川賞受賞作の短編「蒼氓」に続いて、第二部として「南海航路」が、三笠

書房発行の雑誌『長編文庫』創刊号（一九三九年二月）、第二号（同年三月）、第三号（同年四月）、第五号（同年六月）、第六号（同年七月）に、そして、第三部として「聲なき民」（傍線筆者）が、同じ第六号に発表されて完結した。第一部から第三部までをまとめた長編単行本『蒼氓』（三部作）は、新潮社から『昭和名作選集（一七）』として一九三九年八月に刊行された。

日本も世界恐慌の影響で不景気のどん底にあった時代である。石川達三とスタインベックのあいだを繋ぐ線は何も無い。なのに、これら二人の作品には、著しい類似が見られる。両作品の構造までもがそっくりで、それぞれ三部構成になっている。

『怒りのぶどう』

① オクラホマ農民の苦境（第一章—第一章）

一九三四年から翌年にかけて、アメリカ南西部やミシシッピー川流域の平野部に吹き荒れた砂塵によって農作不能となったばかりでなく、これに乗じて農民を食い物にする悪辣な金融資本に傷めつけられて、やむなく故郷を棄てることになる。

② ルート六六途上の旅（第二章—第十八章）

苛酷な旅の中で、病弱と絶望から、一二人の家族の中から一人また一人と脱落してゆく。家族崩壊の危機にさらされる。

③ カリフォルニア中部の連邦キャンプその他での生活（第十九章—第三〇章）

不如意な日常の中でも家族は結束し、他の家族の者たちとの連帯で、希望を失わず生きのびようとす

る。

『蒼氓』

① 第一部・「蒼氓」

ブラジル行き汽船「ら・ぶらた丸」乗船までの、移民収容所での八日間の生活。

② 第二部・「南海航路」

「ら・ぶらた丸」船内での四五日間の生活。

③ 第三部・「聲無き民」(傍線筆者)

ブラジルへ着いてから各自入植するまでの数日間の日常。予想を裏切る苛酷な移民生活の始まりの中
でも、明るさを失わない。絶望を超えた悲惨とはこういう状態なのか。

2

石川は、先の『経験的小説論』の中で、次のように記している。

昭和五年から十年という時期は、日本の農村が大変に窮乏していた時期であった。政府は一人について僅か三百円程度の渡航費補助を支出すことによって、窮乏にあえぐ農民たちをブラジルへ送った。ず

いぶん安上がりな農村対策であった。「蒼氓」はこれら農村出身の移民集団を描くことによつて、政府の移民政策に一種の抗議をするような性格をもっていた。そして最初に世間で認められた私の作品が「蒼氓」であったということは、いささか象徴的でもあった。権力に対する庶民的な抵抗と言う姿勢は、ほとんど私の作家としての全生涯を通じて変らなかつた。世間の人々は知つておりながら黙っているような事、或いはそういうものとしてあきらめているような事を、私は黙つて居られなくなつて抗議しようとする。したがつて私は常に野党的であり庶民的であつた。（『経験的小説論』1）

石川は更に続けて、『経験的小説論』9で、次のように書く。

三十数年にわたる私の文筆生活のなかで、調査に手をかけたのは「蒼氓」三部作と「人間の壁」とであつた。「蒼氓」はもつと正確に言えば調査が目的ではなくて、はからずも南米移民たちと約半年も寝食を共にするような（体験）をした、その結果であつた。その体験すらも、体験をはじめから目的として移民の中にはいつたのではなく、結果的にそうなつたというだけのことであつた。いわば偶然であ

る。偶然の体験が、調査をしたような結果になった。私は調査をする
気はすこしも無かったが、体験は一方的ではあるけれども、調査より
ももっと深く身についた印象を与えられるものである。

『蒼氓』は正確に言えば調査の成果ではなく、「はからずも」の体験の成果であつたにすぎないが、しかし、その体験は調査よりもっと深く強い印象を、石川に与えたのであつた。この時の体験が、体験の衝撃の強さが、駆け出しの新人作家石川達三に与えたインパクトの大きさは想像にあまりある。彼独自の「社会性」は、『蒼氓』第一部・「蒼氓」に続く『日陰の村』（一九三七）、『生きてゐる兵隊』（一九三八―一九四五）のみならず、『七人の敵が居た』（一九八〇）に至るまで脈々と繋がつているのである。『人間の壁』三卷（一九五九年完結）はまさしく、徹底した調査に基づく「ファクト」から「フィクション」への典型と言つても言い過ぎではない。

スタインベックは石川ほどの「調査魔」ではない。『彼らの血は強い』（一九三八）、『忘れられた村』（一九四二）、『爆弾投下』（一九四二）、『ロシア紀行』（一九四八）、『かつて戦争があつた』（一九五八）、『チャーリーとの旅―アメリカを求めて』（一九六二）等はたしかに調査に基づいてはいるが、これらはどちらかと言うと、ルポルタージュないしは紀行文の部類に属している。調査するのは当然の仕事であろう。しかし、『怒りのぶどう』はそうではない。

『怒りのぶどう』出版五〇周年に際してカリフォルニア州バークリーのヘイデイ・ブックス社から『収獲するジプシー』（「エピローグ―一九三八年春」を省いた、七回シリーズ版）が刊行されたとき（一九八八）、この作品は『怒りのぶどう』への道」という副題をつけて久し振りに陽の目をみることになった。

「収穫するジプシー」という呼称は、一九三〇年代アメリカ大恐慌当時に、オクラホマ、テキサス中央部、ミズリー南部、アーカンソー西部から、旱魃、砂嵐、害虫などの自然の猛威と、農地を担保に金を貸した銀行資本の土地収奪のために、先祖代々の農地を失い、やむをえずカリフォルニアに移住してきた三〇万以上の移住農業労働者を指して、スタインベックが名づけたものである。彼らは「オクラホマ」から来た難民だったので、カリフォルニアでは「オーキーズ」という差別語で総称された。アーカンソーからの移住農民は別に「アーキーズ」と呼ばれることもあった。彼らは、カリフォルニア州のサリーナス平野やサン・ウォーキン平野のはずれのヘブロン台地に集落を作つて難民の集団となつた。そしてこの集落は別名「リトル・オクラホマ」と言われていた。

アメリカ社会の重大事件となつたこの事態を広く知らしめるために、サンフランシスコ『ニューズ』紙の編集長ジョージ・ウェストは、『トーティヤ・フラット』で一躍有名になつた新人作家ジョン・スタインベックを起用して、彼の筆さばきを頼りにして、ルポルタージュを書いてもらうことにしたのである。その際、ウェストは、移住農民の生態を知悉しているトム・コリンズをスタインベックへの助言者として依頼した。コリンズは、当時カリフォルニア州カーン郡に設置されていた国営のアービン移住農業労働者キャンプの管理人―事務局長―をしていて、中西部から難を逃れて毎日やって来る難民についての記録を克明につけていた。その記録は、難民の出身地、人数、おとなと子供の数、男女の別、所持品と所持金、彼らの使用している方言、彼らにまつわるエピソードその他を含み、興味深いもので、スタインベックは、『怒りのぶどう』執筆のために、この記録を縦横に利用したのである。この点を『収穫するジプシー』、『怒りのぶどう』に当たつて子細に見てゆくと、二人の關係はただ単に個人的な友情に基づいていただけでなく、たがいの利益に大きく貢献したのである。すなわち、スタインベックはコリンズをとおして、作品のためのなまの材料を手に入れることができ、コリンズとしては移住農業労働者の困窮

状態に対して、作家スタインベックの筆を借りて、一般の人々の眼を向けさせるのに成功したのであった。

このように、大作『怒りのぶどう』誕生の経緯は、まず①サンフランシスコ『ニューズ』紙の編集長ジョージ・ウエストの依頼に応じて、一九三六年一〇月五日から一二日まで七回に分載して同紙に寄稿した「収穫するジブシ」があり、次いで、②「オクラホマの人々」(①の第七部をうけて、移住農業労働者に焦点を絞ったもの)を一九三七年に書き続けた(らしい)が、翌一九三八年一月には放棄し(たらしい)、③一九三八年二月から五月にかけて「レタスバグ事件」執筆に集中して、約七〇、〇〇〇語を書いたにもかかわらず、①の二番煎じであることに満足できず、妻キャロルからも認めてもらえなかったこともあって、すべてを破棄し、新たに『怒りのぶどう』を書き始めたのであった。

スタインベックとコリンズの協力の成果は、二人だけのものに留まらず、大きな波及効果を生み出した。その一つが、「カリフォルニア・サイモン・J・ルービン協会」による『彼らの血は強い』(一九三八)の出版であった。カリフォルニア・サイモン・J・ルービン協会というのは、連邦農業安全保障局(FSA)の情報部門で働いていたヘレン・ホズマーが、移住農業労働者の窮状を見かねて、友人や同僚の援助を得て作った組織で、早くからカリフォルニアの移住農業労働者の側に立つて強力な発言を続けていた、サイモン・J・ルービンの名を冠して彼女が命名したものである。スタインベックがサンフランシスコ『ニューズ』紙に七回にわたって連載していたルポルタージュを一冊にまとめて出版にこぎつけたものである。いわばパンフレット風のこの小冊子『彼らの血は強い』のために、スタインベックは一章を付け加え、「エピローグ—一九三八年春」を第八章としたのであった。この「エピローグ—一九三八年春」は『怒りのぶどう』第二五章の原型をなしている。

もう一つは、女優のヘレン・ガーガン・ダグラスが音頭を取って、移住農業労働者へ救済物資を贈るための基金

募集の目的で、ハリウッドの名士を集めて組織した「ジョン・スタインベック委員会」である。スタインベック自身は、『怒りのぶどう』一〇部を特別の革張り装丁で作らせ、それに一ページを糊づけして、「これはジョン・スタインベックの申し出によって――に捧げるために特別に仕立てた一〇冊のうちの二冊である」と記入して、晩餐会の席で競りに出したのであった。そして買い取った人の名前を――欄に書き込み、署名して手渡した。売名を極度に嫌ったスタインベックとしては、ただの一度の経験とはいえ、稀有な出来事であったと言えよう。

3

『怒りのぶどう』も『蒼氓』も、登場人物を一つの集団として扱っている点を特色としている。「集団人」(「グループ・マン」)という観点で捉えようとしているのである。

「集団人」という概念は、スタインベック固有の概念で、正確に言うと、スタインベックが文学創作のうえで大きな影響を受けた生物学者エドワード・F・リケッツからの教示を得て身につけた考え方である。スタインベックは、一九三五年前後の時期に、カリフォルニア州モンテレイ郡のパシフィック・グループで、「方陣の理論」という二頁のエッセーを書いている。今日から見れば、きわめて斬新な、先駆的な生態学的概念と言わなくてはならない。その要点を次に見てみよう。

人間は究極的な個人存在ではなく、より大きな生き物、すなわち方陣の構成単位である。人間の身体の中にはいろいろな構成単位、つま

り細胞があつて、それらはおのおの独自の性質を持つており、したがつて死滅すれば他の細胞に取つて代わられ、また、他の細胞から攻撃を受けて殺されることもある。特殊な機能を持った細胞もあれば、代替可能な細胞もあつて、さまざまである。何十億という細胞が集まつて、人間という新しい個体を構成しているのである。しかし、人間は彼の細胞の総和以上のものであり、人間の性質は、彼の細胞の総和が担う性質とはけつしてイコールではない。人間は、彼を構成している細胞たちの想像もつかない、まったく別個の性質を持つていたのである。

(第一節)

人間は、彼よりも大きな生き物、すなわち方陣の構成単位である。方陣にはそれ独自の苦痛、欲求、渴望、闘争があり、それらは、構成単位としての個々の人間の苦痛、欲求、渴望、闘争とは違ふものである。ちようど、個々の人間の苦痛、欲求、渴望、闘争が、構成単位としての細胞の持つ苦痛、欲求、渴望、闘争と違つているのと同じことなのである。方陣の性質は、その構成単位である人間たちの性質の総和ではなくて、方陣独自の感情と目的を持った別個の個体（の性質―筆者注）なのである。そしてその感情や目的は、構成単位としての人間のものとは異質の、次元の違ふものなのである。

(第二節)

われわれはこれまで常に、人間を個別的な存在として研究の対象としてきた。つまり、個々の単位としての人間を詳しく調べることで、

人間や人間の行動を研究しようとしてきた。それはまるで、人間の身体の細胞を調べれば、人間の性質が理解できると考えているようなものではないか。方陣をよく観察し、方陣がそれを構成している単位としての人間とはまったく別の、一個の新しい個体であることを認識し、更に、さまざまな刺激のもとでの方陣の習性をたがいに関連づけ、分析しながら、方陣がこれまで達成したいろいろな事柄を振り返ってみるならば、われわれは、おそらくやがては、方陣とは何かということや、方陣の性質、その動き、その目的等について知ることが可能になるだろう。そして、無意味で破壊的な、てんでんばらばらな現象が弥漫している今日の世界の中に、方陣の運動を導入することさえ可能となるであろう。

(第一〇節)

『怒りのぶどう』第四章での、説教師ケーシーの言葉「たぶん、われわれが愛しているのは、すべての男たち、すべての女たちなのだ。おそらく、それが聖霊なのであって——人間の霊であり——全体なのだ。おそらく、すべての人間が一つの大きな魂をもっていて、一人ひとりがその魂の一部分なのだ」ってな。」は「集団人」の考えを示している。

『怒りのぶどう』は何十万という多数の難民を集團として扱ってはいるが、しかしそこには同時に、数人の主要な登場人物がいることも忘れてはならない。ジョード一家は次の一二人によつて構成されている。

祖父ルルト六六途上の旅の早い時期に発作を起こして死亡。

祖母ルルト六六途上の旅の最終局面で死亡。ただし、カリフォルニア到着後、最初の到達地ベイカーズフィールドに埋葬される。

父ジョード（オールド・トム・ジョード）はオクラホマの農場では大黒柱だったが、旅の途上に出たとたん、意氣阻喪し、マー・ジョードと息子トムに主導権を明け渡す。最終場面の洪水の際には、懸命に力を發揮はするが、オクラホマの農場を失つた時に、彼はいわばふぬけになつてしまつたようだ。

母ジョード（マー・ジョード）はジョード一家を最後まで支える強い母親。何事にも挫けない一家の砦ともいふべき存在。スタインベックが造型に成功した女性の一人として不滅の人物。

叔父ジョード（アングル・ジョード）は自分の不注意で妻を死なせたという罪の意識にさいなまれている。その償いとして、誰にでもすすんで施しをする。氣弱な男。

ノア・ジョードは一見知恵おくれのような印象を与える口数の少ない長男。旅の途上のコロラド川での水浴に満足し、そこを離れたくないと言ひ張つて、皆とのカリフォルニアへの同行を拒む。

トム・ジョードはマーとともに、『怒りのぶどう』の中心人物。ジョード家の次男。酒場での喧嘩で殺人を犯し投獄された後、仮釈放となつて一家のもとに帰つてきてから、しだいに一家のリーダー的存在へと変貌し成長してゆく。そこには、説教師ケーシーの「集團人」の教えの影響が強くにじみでている。ケーシーが自警団員に殺されると、仕返しとしてすぐにその男を殺してしまふ。お尋ね者となるので、一家から離れ

てゆくこととなる。その時のマーへの彼の言葉は感動的であり、本作品の主要なメッセージとなつてゐる。少し長いが、引用をしたい。

「なあ、マー。おれは昼も夜もずっとただひとり隠れていたんだが、おれがだれのことを考えていたと思うかい？ ケイシーさんのことなんだ！ 彼はよくしゃべった。おれはうんざりしたもんだ。だけどさ、いま、おれはあの男のいったことを考えて、思い出すことができるんだよー何もかも。彼はこういったことがあった。あるとき自身自身の魂を見つげようと荒野にはいつていったが、自分の魂なんか何ももつていないつてことがわかつたんだ。自分はただ、すごく大きな魂のほんの小さなかけらをもつてにすぎないつてことがわかつた、といったんだ。荒野なんてなんの役にも立たないつていうんだよ。というのは、彼のもつている小さな魂のかけらは、残りの人のものといっしょになつて、一つの完全なものにならないかぎりには、何の役にも立たないからなんだ。……」

……
（二）でも、おまえがいなくなつたら――筆者注）わたしや、いつたいどういふふうにしておまえのことを知つたらいいんだい？」

……

「おれは暗闇のなかのどこにでもいることになるのさ。おれはいたるところにいることになるんだーマーが見るどんなところにもな。飢えた人間に飯が食えるように喧嘩が起こつてるところに、おれはいるんだ。警官のやろうどもが人をぶつたたいるところに、おれはいるんだよ。もしケイシーさんのいうことがほんとうなら、おれは、人間が腹を立ててわめいているそのわめき声のなかにいるし、それからーひもじい思いをしている子どもたちが、晩飯のできたことを知つて笑つているその笑い声のなかにもいるのさ。それからまた、家の者が、自分で作りだしたものを食つて、自分で建てた家に住むようになったときにーおれはそこにもいるんだぜ。わたったかい？ おれはまるでケイシーさんのようにしゃべつてゐる。あの男のことばかり考えすぎたせいだろうよ。ときどきあの男の顔が見えるような気がするよ」

『怒りのぶどう』第二八章

アル・ジョードはジョード家の三男。くるまと女の子に夢中の一六歳。トムの言うことをよく聞く働き者。

ローズ・オブ・シャロンはトムの妹。コニー・リバースの若妻。妊娠している。貧窮に耐えられなくなつてコニーが彼女を棄てて一家を去るので、彼女は不安から不機嫌になる。赤ん坊を死産するが、マーに励まされ

て、あふれる母乳を飢え死に寸前の見知らぬ男に与える。これが『怒りのぶどう』の最終場面となる。

コニー・リバース・ローズ・オブ・シャロンの夫。一九歳。ラジオ技師の夢を捨てきれず、妻を棄てて消えてしまふ。トムと正反対の弱い男。

ルーシー・ジョード・トムの一二歳の妹。弟ウインフィールドとばかり遊んでいる無邪気な思慮の浅い娘。いざかいを起こした相手に、強い兄、人を殺した兄（トム）のいることを喋ってしまい、それがトムの離脱の原因となる。

ウインフィールド・ジョード・ジョード一家の末っ子。一〇歳。無邪気だが、自分中心の考えしかもたない。

ジョード家の家族ではないが、『怒りのぶどう』の中でより重要な登場人物として、カリフォルニアへ同行したジム・ケーシーがいる。

ジム・ケーシーは説教師。トムの精神的指導者。きわめて熱情的な牧師だったが、同時に女たらしでもあった。

ある時「この世には善も悪も無く、人間のすることだけがあるのだ」と悟り、貧しい農民の支えになろうとする。ジム・ケーシーのインシヤルがイエス・キリストと同じJ・Cであることは示唆的であろう。イエス同様、彼は殉教者として殺されるが、トムという「弟子」が誕生するのである。踏みつけられた農民を守るという大義に二人の強い繋がりを見ることができるとはではないか。

そして、ここで見逃してはならないのは、これら一二人十一人の小集団もまた、一つの単位集団人（「ユニット・グループ・マン」）となつて機能しているという点である。

次に『蒼氓』の登場人物を見てみよう。

『蒼氓』では、二〇九家族、九四七人が登場して、集団としてブラジルへと移住する。第三部・「聲無き民」（『蒼

唄』全体の五分の一の分量。ブラジル・サントスへ着いてから、各自分散して割り当てられた入植地で過ごす初期の生活)までの、国立神戸移民收容所(第一部・「蒼唄」と「ら・ぶらた丸」船内(第二部・「南海航路」)での九〇〇人を超える多数の農民たちの動き、また彼らの不安におののくうごめきは、個々の喜怒哀楽を超えて、否応なしに「集団人」のそれにならざるを得ない。移民收容所といい、移民船といい、まさしく、これらは結果的に「方陣」(「ファランクス」―拙論「アメリカ小説とモダンリズム」、成城法学『教養論集』第一四号、一九九八参照)を形成しているのである。『怒りのぶどう』での国営移住農業労働者キャンプのそれを凌いでいるとさえ言えるのではないだろうか。

九四七人の中の主な登場人物を列挙してみよう。

ここでも、次の五〇人は、九四七人の大集団の中で、それを構成する下位次元の小集団人(「ユニット・グループ・マン」)として機能している点に注目する必要がある。

佐藤一族⇨孫市(徴兵検査一年前)とお夏(孫市の姉、二三歳、元紡績女工、紡績会社監督の堀川栄治から結婚を申し込まれたが、泣く泣く渡航に踏み切る)。前年に父を亡くし、二人きりの姉弟。秋田県湯沢出身。

お夏は移民船の船室で夜、『植民雑誌』社勤務の派遣移民監督助手・小水から性的いたずらをされるが、抵抗できない。

門馬一家⇨母親くら(通称、婆さん)、勝治(佐藤夏との偽装結婚のため、佐藤へと名義変更する)、義三(自動車修理工―魯鈍)。

大泉一家⇨進之助、妻(四〇数歳)、息子一三歳と娘五歳。秋田県・田沢出身。

本倉一家⇨夫と妻、子供五人。田沢で大泉一家の隣人。本倉本人がトラホームのため、渡航不合格となり、一家

は帰郷する。

勝田氏||妻と七人の子供。一六歳の娘は親戚の青年と婚約。金持ちで企業移民。ブラジル・アリアンサに広大な土地所有の地主。

中津井氏||妻と子供三人。詐欺・拐帯で収容所内から、刑事に逮捕連行される。やむなく一家帰郷となる。熊本県出身。

麦原一家||妻と娘・お常（一五歳くらい、トラホーム）と息子。青森県出身。

黒川一家||妻と子供九人。親戚の一三歳の娘も同行。生後三か月の赤ん坊は栄養不良。帰る旅費が無いために、不合格が合格となる。熊本県出身。

三浦氏||歌が得意。八木節を歌い、踊る。会津若松出身。

堀内氏||五〇歳。耳下腺炎を患う。企業移民で単独渡航。ブラジルのコーヒー園で四年間働いたが、息子を日本の小学校に入れるため親戚に預けて、再渡航する。岡山県出身。

鹿沼覚太郎||妻と二人。ブラジルでコーヒー園を経営し成功している。山陰の田舎に残した両親をブラジルへ連れてゆくために、一時帰国して再渡航。父清兵衛（七〇歳くらい）は義眼でトラホームではないのに、サンパウロで下船を許されず、一家は港に留め置かれる。一か月後に再検査をして、二か月後に息子・覚太郎の許に渡される。

邱世英||支那人。シンガポールの銀行員。英語堪能。ホンコンから乗船する。

これら代表的登場人物を含む九四七人も移民と、小水に代表される付き添いの役人たちは、しかし、輝かしい未来を望んで隊伍を組んだ「方陣」ではなかった。石川の表現では、それは淋しい方陣のようであった。しかし、

そこに「一人の」という形容詞が冠せられていることには注目すべきであろう。

マストにO・S・K(大阪商船株式会社―筆者注)の旗が上がった。

うしろのマストには日章旗があった。すると船というものが一人の淋しい旅人のように見えた。

〔蒼氓〕 第二部・「南海航路」

同じ「方陣」とは言っても、「へわたしへ」からへわれわれへ」という「連帯」を目指した『怒りのぶどう』の「集団人」によって形成された方陣(ファランクス)と、有無を言わさず船に乗せられた(その前には収容所に入れられた)形だけの「方陣」(集団人)とは明確に区別しなくてはならない。

『怒りのぶどう』での「方陣」の形成は次に見るとおりだ。

土地を追われた一人の人間、一つの家族、……わたしは孤独で、途方に暮れている。……一つの家族がどこかの道路わきの溝のなかでキャンプすると、もう一つの家族が自動車でやってきて、テントがまた張られる。二人の男がしゃがみこみ、女たちと子どもたちは耳を傾ける。ここに結び目ができるのだ……これが接合子なのだ。……「わたしはすこし食べ物を持っている」+「わたしは何も食べ物をもっていない」だ。もしこの問題から、足し算の合計が、「われわれはすこし

食べ物をもっている」となるならば、ことはすでに進みはじめ、運動は方向をもっているのだ。……これこそが始まりなのだ——「わたし」から「われわれ」への。

(第一四章)

『蒼氓』が描いている一個の社会的集団は、石川の他の代表作、たとえば『日陰の村』が湖底に沈む運命にあつた小河内村の住民を、『生きてゐる兵隊』が南京攻略の際の兵隊を、集団として描いたのと同系列のものである。明確なコンセプトを持つて描こうとしたスタインベックの「集団人」とは、その意図において径庭はあるが、結果として得られたものは、綿密な考量に値するのである。

4

『怒りのぶどう』においてスタインベックは、ジョード一家の遍歴の物語の章と、彼らを包んでいた時代的・社会的背景を描く章との、種類の異なつた二つの章立てを試み、物語の立体化に成功している。彼は前者を「個別章」、後者を「一般章」と名付づけているが、批評家たちは後者だけを「中間章」（ときに「差し挟み章」と呼んでいる。全三〇章のうち、「個別章」(↓「物語章」)が一四、「中間章」が一六、とほぼ交互に組み合わされている。

「個別章」——二、四、六、八、一〇、一三、一六、一八、二〇、二三、二四、二六、二八、三〇の各章。

「中間章」——一、三、五、七、九、一一、一二、一四、一五、一七、一九、二二、二三、二五、二七、二九の

各章。

一九三〇年代の大恐慌という時代的・社会的背景を、いわば社会学的に描写することで読者を作品の世界に巻き込み、その中で、ジョード一家の苦しい遍歴を叙述してゆくという手法を編み出したスタインベックの独創こそが、『怒りのぶどう』を、二一世紀の今日なおお色あせることのない大叙事詩としているのである。

『蒼氓』にも「中間章」はあるのか？ それは無い。しかし、同じ金融経済恐慌に傷めつけられた日本社会が背景にあつてはじめて、農村の疲弊と、それに起因したブラジル移民の悲惨があつたことを思えば、石川がそれを見のがすはずはなかつた。「中間章」的な描写を次に見てみたい。

ぬかるみの坂道を自動車はまだ続いていた。三の宮駅に汽車が着くたび毎に、親子手を引きあい、荷物をかつぎ、ぞろぞろ下りて来るのだ。殆ど大部分の者が始めての自動車と言うもののためらいながら乗るのだ。その車の行列を横切つて、灰色に暗い雨空にりんりんとしたまじしい鈴の音を響かせて、号外売りが叫びながら走っていた。ロンドン軍縮会議が丁度真最中である。朝の新聞では軽巡洋艦の艦型制限で議論沸騰し再び委員会付託となつた事、アメリカは依然として大巡十八隻案を固持していると言う事、而もこの問題をよそにしてイギリスはシンガポール要塞の工事中止声明を裏切つて工事費の増額予算を議決した事を知らしている。一方では現職文部大臣小橋一太が越鉄疑獄に連座して、辞表を出した勿々に起訴拘留された事を報じている。

物情騒然として暗澹たる中に、胸を刺すような鋭い号外の鈴の音が絶えず移民の自動車の行列を突っ切つて走っているのだ。

(第一部・「蒼氓」)

第一部・「蒼氓」には更に、東京市会議員大疑獄に次いで、藤田謙一の合同毛織事件と天岡直嘉の売勲事件、山梨半造の釜山取引事件、小川平吉の私鉄疑獄等々の忌まわしい事件が列挙されている。こうした政財界の腐敗の一方では、一月の金輸出解禁とそれに伴う消費節約のどさくさ、財閥の売国的ドル買事件と国民の憤激、二月二十日の総選挙での選挙違反、工場のストライキと共産党事件の裁判が報じられ、日本国の終りを見るような悲しみが描かれている。

第二部・「南海航路」では、日本からの無電のニュースが、「ら・ぶらた丸」船内の移民たちのところへ届く。

一・ロンドン軍縮会議は暗礁にのりあげて云々……

二・四月二日、日本全国に暴風雨がきて、桜の花はすっかり駄目になった。

三・元老西園寺公が病気で、首相は昨日興津へ見舞いに行った、等々。

第三部・「聲無き民」のサン・パウロの収容所で、それぞれの移転先耕地の指示を待っている間に移民たちが見た光景は以下のようなものであった。

収容所の別の棟には、イタリー人やポルトガル人やアフリカの黒人や、各種の移民が二、三十人ずつかたまつて収容されていた。欧州大

戦で負傷したという、肩に大きな傷のあるロシア人もいたし、敵方のドイツ人もまじっていた。中には耕地で食えなくなったから逃げ出して来たというロシア人も収容されていた。(第三部・「聲無き民」)

小説を書くに当たってその時代背景を描写するのは、当たり前のことと言うべきかも知れない。しかし、当時の日本の近代文学の主流は、私小説であり、個人中心の一点張りであり、作家の典型的な在りようは、伊藤整の言う「現世放棄者」ではなかったか。そして日本の当時の文学者の基本的倫理は、社会的秩序の外での「アウトロー」の精神であった。すなわち、世俗の道徳への反抗、常識からの逸脱等々。

その中であって、石川の主張は際立って常識的であったと言わなくてはなるまい。石川における常識の勝利は、次に見るとおりである。

常識とは、過去に於けるあらゆる非常識を、修正し克服し総合したところの、結論である。従って、今日の常識を打破するような新しい非常識は、容易なことでは出て来るものではない。非常識は三日でも出来るが、常識は数十年を経てはじめて常識となる。常識を知らずに非常識な道を説く者は、空想として面白だけである。

(石川達三『書斎の憂鬱』、一九四九)

「蒼氓」の芥川賞決定の際に、菊池寛は次のように述べている。

芥川賞の石川君は先ず無難だと思っている。この頃の新進作家の題

材が、結局自分自身の生活から得たような千篇一律のものであるのに

反し、一団の無智な移住民を描いてしかもそこに時代の影響を見せ、

手法も堅実で、相当に力作であると思う。

〔『文芸春秋』一九三五年九月号、「話の屑籠」〕

「手法も堅実で……」とは、万人の常識からはずれていないことを称揚して、その重要さを述べているのである。

時代的・社会的背景を叙述する「中間章」とは、スタインベックの独創ではあっても、時代的・社会的と言以上は、万人が納得する常識に支えられたものでなくてはならない。したがって、石川の場合の社会的・経済的・あるいは政治的叙述も「中間章」というような呼称こそ用いてはいないが、それと同等の役割を『蒼氓』の中で果たしているのである。

5

『蒼氓』第一部・「蒼氓」において、神戸の海外移民収容所では、八日間とはいえ、九四七人という多数の群衆

の規律を維持するために、様々な工夫がなされている。前途がどうなるのか何もわからない農民の不安を少しでも和らげる、それは最低の努力と言ってもよい。

これから船内生活の準備である。……移民の中から役員を選抜するのである。船内新聞係、風紀衛生係、運動係、連絡係、食事世話係、青年会長、婦人会長、等々。是れ等に色分けした腕章を与えて船内生活の整備をやるうというのである。

第二部・「南海航路」の「ら・ぶらた丸」船上では、四五日におよぶ長い船旅を少しでも楽しいものとするための工夫がなされている。九〇〇人を超える群衆をいかにして統率してゆくかの努力と言ってもよいだろう。

午後八時、特三食堂に全家族の家長を集合させた。しかし二百九家族から集まったものは五十三人にすぎなかった。あとは船酔いと神戸以来の風邪とでまいつている。ここで船長以下の高級船員の挨拶があり、ドクターは明朝からコレラの予防注射をすることを告げ、事務員は船内生活の注意を述べた。清水節約、入浴の順序、便所の使用方法、洗濯の場所と時間。

そのあとで村松監督からA B D E四室について、室長一名、副室長

二名ずつを指名し、監督と連絡をとって仕事を手伝ってもらうように頼んだ。

これらと同工異曲の工夫が、『怒りのぶどう』第二章でもなされているのは、注目に値する。その原型を『収穫するジプシー』第四章（「連邦キャンプ」）から引用する。

そのキャンプの住民は自治意識が高まり、単純だが、それだけに実際のである民主制を推し進めてきた。このキャンプは四つのユニットに分かれている。そのユニットは、中央委員会、娯楽委員会、労働委員会、友好委員会である。どのユニットも直接選挙で選ばれている。構成員はすべて、所属するユニットの投票で選ばれる。リコールもやはり投票による。もちろん、キャンプ管理人には投票結果への否認権がある。だが、委員会の決定をくつがえす必要性は実際にはない。

これらの点を子細に見てゆくと、あの大恐慌の及ぼしたインパクトの激しさと、それを正面から受け止めて真剣に立ち向かっていった、日本の作家石川達三とアメリカの作家ジョン・スタインベックの身につけていた鋭敏な時代感覚の同質性に感動を覚えないではいられない。比較文学の尺度などを超えた、それこそ「マクロの文学」の地平で理解すべき、おおらかな常識の勝利であり、人間共通の讃歌と言うべきであろう。

『怒りのぶどう』第一八章の最終場面で、すでにニードルズを過ぎてカリフォルニアに入っていたジョード一家のおんぼろ車は、モハービー砂漠の真ん中を苦勞して越え、バーストウの町を経て、明け方にはテハチャップを通り過ぎた。その時の情景描写は次のとおりで、彼らの感動がよく伝わってくる。

彼らは朝の薄明かりのなか、テハチャップを走りぬけた。そして太陽が彼らの背後にのぼった。そしてその時―突然、下のほうに広がっている大平野が見えた。アルは急ブレーキをふんで、ハイウェイの真ん中に車をとめた。「すげえな！ 見ろよ！」と彼はいった。ブドウ畑、果樹園、美しい緑の平坦な大平野、列をなして植えられている木々、そして点在する農家。

するとパーがいった。「すげえな！」はるか遠くに見える都市、果樹園地帯に点在する小さな町々、そして平野のうえで金色に輝く朝の太陽。……

パーはため息をついた。「こんなところがあるなんて、知らなかったな」桃の木々に、クルミの林、暗緑色のオレンジ畑。そして木々の

あいだの赤い屋根、そして納屋―豊かな納屋。……

ルーシーとウィンフィールドがわれ先に車から滑りおり、それから、この大平野をまえにして、口もきかずに、畏れ、当惑して立ちすくんだ。風車がひとつ日光にきらりと光り、回転している翼は、……小さな反射信号機のように。ルーシーとウィンフィールドはそれを見つめ、ルーシーがささやいた。「これがカリフォルニアよ」ウィンフィールドはだまって、言葉の一音節一音節を唇でかたどつてみた。

『蒼氓』第二部・「南海航路」の最終場面での、「ら・ぶらた丸」のブラジル到着の際の（石川の）情景描写は次のとおりだ。

十一日に亘る長い航海の終わった朝、リオ・デ・ジャネイロの美しい海岸がほのぼのと船首にうかび上がつて来た。移民はみなデッキにかけ上がつて、待望のブラジルを眼のあたりに眺めた。清らかな海、青々とした街路樹が船から眺められた。特徴のある、卵を立てた形のコルコ・バード山もかすかに見えた。ア・ノイテ新聞社の突き立ったビルディングが白く波の上に見え、美しい海岸には灰色の軍艦が二隻つながれてあった。

移民たちは検疫に出るために盛装し、緊張した気持でデッキに並び、近づいてくる海岸に眸を凝らした。

両作品での、目的地到達の喜びの描写は、たがいに酷似していると言わなくてはなるまい。しかし、『怒りのぶどう』では、ジョード一家の人々の喜びの声がストレートに記述されているのに対して、『蒼氓』では、作者の説明的叙述になっていることを見逃してはならない。それは、前者の爆発的な喜びの発散とは一味もふた味も違う、声無き民の、悲しみを秘めた感激の、作者による描写によるものだからである。第三部・「聲無き民」の悲哀を予告するものでさえあるからだ。

第二部・「南海航路」最後の次の一節は、スタインベックには無い、そしてまた、おそらくはアメリカ文学では考えられない描写であると思われる。日本人の常識を重んじた石川に固有の、なんら恥じるところの無い、昭和一〇年代の日本の、日本人の、精神的風土を如実に表していると思われるので、引用する。

四月二十九日。忠良なる日本の臣民はリオの港にあつてもこの日を忘れはしなかつた。……移民たちはデッキにならんで、高級船員とともに、船長の発声で万歳を三唱した。それから長い長い今日までの航路を逆に辿つて、東北の空にむかつて最敬礼をし、国歌を二回合唱した。すると、とうとう世界の果てまで来てしまった自分たちがしみじみと考えられた。涙ぐんだ歌声にうちしめつた君が代は、老若男女、

さまざまの声のまじったコーラスとなって、ブラジルの岸边、打ち寄せる磯波のうえに美しい韻律を流した。……

7

『怒りのぶどう』も『蒼氓』も、作品の世界は陰鬱で悲惨なものである。陰鬱で悲惨な時代のいわば年代記である以上、それは致し方ないことであるのだ。しかし、各々の登場人物に対するこの二人の作家のまなざしは、真剣で温かいものがあり、そのことが、両作品を大傑作たらしめ、文学史上に輝かしい位置を与えていることは否めない。二人によつてあたかも示し合わせたかのように表現された、日米双方の農民の心意気の共通性を例示することで、小論を締めくくりたいと思う。まず『怒りのぶどう』から。

トムはテントの列を見おろした。それは地面よりもほんのすこし明るい灰色をしていた。一つのテントのそばで、古ぼけた鉄ストーブの割れ目から、オレンジ色の炎がパツともれているのが見えた。灰色の煙がずんぐりした煙突から吹きあがっていた。

トムはトラックの横板をのりこえて、地面にとび降りると、ゆつくりとストーブのほうに歩いていった。ストーブのまわりで働いている若い女の姿が見え、その女が片腕で赤ん坊を抱きかかえ、赤ん坊が、

女の着ているブラウスの下から頭を出して、乳をのんでいるのが見えた。そして若い女は、火をついたり、いっそうよく風をいれるためにさびたストーブのふたを動かしたり、オーブンのとびらをあげたりして、動きまわっていた。そのあいだじゆう赤ん坊は乳をのみ、母親は巧みに腕から腕へと抱きかえた。赤ん坊は、彼女の仕事にも、優美な、すばやい彼女の動きにも邪魔にはならなかった。そしてオレンジ色の炎はストーブの割れ目からチヨロチヨロともれて、テントにゆらゆらと映えていた。

トムはいっそう近くに寄っていった。いためているペーコンと、焼けているパンの匂いがした。東のほうから、夜明けの光がすばやくひろがってきた。トムはストーブのそばに寄って、両手をかざした。女が彼を見てうなずき、編んだ二筋の髪の毛がさっとゆれた。

「おはよう」と彼女はいつ、フライパンのペーコンをひっくり返した。

テントの垂れ布がぐいと押しあげられて、若い男がひとりあらわれ、続いて年配の男が出てきた。彼らは新しい青いジーンズをはき、真鍮のボタンの輝いている、詰めものがはいつていてごわごわしたジーンズの上着を着ていた。彼らの顔は彫りが深く、よく似た顔つきを

していた。若い男は黒い無精髭を生やし、年上の男は白髪は無精髭を生やしていた。頭と顔はぬれ、髪の毛からはしずくが垂れて、ごわごわした無精髭には水滴がついていた。頬はぬれて光っていた。ふたりは並んで立って、明るくなりかけている東の空を静かに見いつていた。彼らはそろってあくびをすると、山の端の光を見つめていた。それからふりむいて、トムに気づいた。

「おはよう」と年上の男がいったが、その顔は愛想よくも悪くもなかった。

「おはよう」とトムがいった。

すると、若いほうの男も「おはよう」といった。

顔の水がゆっくりと乾いていった。彼らはストロブのそばにやってきて、手を温めた。

若い女は仕事の手を休めなかった。一度赤ん坊を下におろして、おさげに編んだ髪の毛をひもで縛ったが、その二本のおさげは、彼女が仕事をするにつれて大きくゆれた。彼女は大きな荷箱にブリキのカップを並べ、ブリキ皿とナイフとフォークを並べた。それから、たつぷりとした脂のなからベーコンをすくいあげて、ブリキの大皿に盛りあげると、ベーコンはブツブツ、シューシューと音をたてながら、カ

リカリにちぢれていった。さびたオープンのとびらをあけて、高く盛りあがった大きなパンがいつぱいはいつている四角い平鍋をとりだした。

パンの匂いがあたりにたちこめると、男はふたりとも深く息を吸いこんだ。若い男が、「ああ、たまらんな！」と小さい声でいった。すると、年上の男がトムに向かつていった。「朝飯はすんだのかね？」

「あの、いや、まだですよ。だけど、うちのもんは向こうにいるんです。まだ起きちゃいませんがね。たつぷり眠らなくちゃならないでね」

「じゃ、わしらといっしょにおすわりなさいよ。たつぷりあるんだからーありがたいことだ！」

「ええ、ありがたい」とトムがいった。「あんまりいい匂いがするんで、いやとはいえませんや」

「いい匂いだろう？」と若いほうの男がいった。「生まれてからこんないい匂いをかいだことがあるかい？」彼らは荷箱のそばにいつて、そのまわりにしゃがみこんだ。

「このあたりで働いているのかい？」と若い男がいった。

「そのつもりなんだ」とトムはいった。「昨夜やってきたばかりで

ね。まだ探してみるチャンスがないんだよ」

「おれたちは一二日間仕事にありついたらよ」と若い男がいった。

ストープのそばで働いていた女がいった。「新しい服まで買ったんですよ」ふたりともごわごわした青い服を見おろして、ちよつと恥ずかしそうに微笑を浮かべた。女はベーコンと茶色の盛りあがつたパンのはいつた大皿と、ベーコンのグレイビーのはいつたポウルと、コーヒーポットを並べ、それから自分の箱のそばにしゃがみこんだ。赤ん坊はまだ、女のブラウスの下から顔を出して、乳を吸っていた。

彼らはそれぞれの皿に盛りわけ、ベーコンのグレイビーをパンにかけて、コーヒーに砂糖をいれた。

年上の男は口いっばいにほおばって、何度も何度も噛んではむしゃくしゃ食べ、のみくでした。「いや、こいつはうまいな」と彼はいつて、またもや口いっばいにほおばった。

若い男がいった。「おれたちはもう一二日間たつぷりと食ってきたんだ。一二日間、一食も欠かしたことはなかったぜーうちのもののみながらね。仕事をして、賃金をもらって、そして食ってきたのさ」彼はふたたび、ほとんど気がいじみた勢いで食べはじめ、またもや皿いっばいに食べ物をとった。……

いまではもう朝の光も色づいていた。赤みを帯びた輝きだった。父親と息子は食べるのをやめた。東のほうを向いているその顔が、暁の光に照らされていた。山の映像とそれを越えてさしてくる光が彼らの目に映っていた。やがて彼らはカップのコーヒーのかすを地面に投げすてると、いつせいに立ちあがった。

「もう出かけなくちゃならん」と年配の男がいった。

若いほうがトムを向いた。「なあ」と彼はいった。「おれたちはパイプを埋める仕事をしてるんだよ。いつしよにやりたいなら、たぶん仕事につかせてやれるぜ」

トムはいった。「ええ、あんたがたはほんとに親切でいい人だな。

それに、朝飯をごちそうしてくれて、ほんとにありがたいと思つています」

「いや、よくおいでくださった」と年配の男がいった。「仕事がないのなら、させてもらえるように計らつてあげるよ」

「そりゃ、仕事はしたいですよ」とトムはいった。「ちよつと待つてくれませんか。うちのもんについてくるから」彼は急いでジョードのテントにいつて、かがみこんでなかをのぞいた。……

トムがもどつてくると、ふたりの男は待ちうけていた。若い女はマ

ットレスを一枚外に引っぱりだして、赤ん坊をその上に寝かせ、皿を洗っていた。……
（『怒りのぶどう』第二章）

次に『蒼氓』第三部・「聲無き民」の最終場面を紹介する。ブラジル・サントスで指定された農場―サンパウロ州サンタ・ローザのサント・アントニオ農場―での生活の三日目である。

裏の板戸をひらいて外に出ると、部落はまだ未明の暗がりであった。大陸の東の果てに金色の雲が横に流れて、低地一帯には真つ白な霧が立ちこめて淀んでいた。その霧の海の遠くの方に高い丘が一つ一つ黒い頭を見せていて、瀬戸内海とその島々とを見るようであった。清冷な大陸の朝風が亘って、夜通し道に寝ころんでいた馬や牛が、連れ立ってプレエジョン（沼地）へ草をさがしに降りて行くのであった。鶏が近処の草の茂みに卵を産んだと見えて、高い鳴声を立てた。少しはなれた大泉さんの家の煙突から白い煙が上がりはじめると、やがて彼がのそりと裏の草原へ小便をしに出て来るのが見えた。彼の一家も平和な営みをはじめようであった。

お夏は船から持ってきた草履をはき、牛や馬の糞で一ぱいになっている凸凹の道を、下の方へ山水を汲みに行った。息を切らせて帰って

くると、孫市や義三が草むらで顔を洗った。

お夏は弟の傍に立って遠い日の出を眺めた。とろとろと融けた太陽が火の玉になって輝きながら雲の上にとちらと浮かんだ。すると赤煉瓦の小舎の壁に横縞をつくってバナナの木の影がくつきりとうつつた。

彼女は頬に朝の最初の日光の温かさを感じた。その温かさは皮膚を透し血管を流れて五体にしみわたるようであった。弟は洗面を終ると労働のポケットからタバコを出して火をつけた。日光をうけてオレンジ色の煙が流れた。その煙の向こうを金色の矢のように音もなく飛んで、蜂雀が野生の南瓜の黄色い花へ行った。

「ああ！おりや安心した……」とお夏は独りごとのようにつぶやいた。その意味は弟には通じなかったかも知れないが、ただ彼女はこうして身の行く先のきまつた事に、何はともあれ安らかなものを感じていたのであった。……

この部落の人々の……日がな一日紫赤土にまみれての労働の中にも、他人にはわからない多くの幸福がある。……新移民たちが日本から描いて来た数々の夢は幻となつて消えたが、消えたあとに残る他の幸福があることがおぼろげながらわかつて来た。ここはブラジル国の土でもなく日本人の土でもない。ただ多勢の各国人が寄り集まつて平

等に平和に暮らす原始的な共同部落というに過ぎなかった。というよりもむしろ、大陸の大自然のなかに迷いこんだ人間たちの住む小さな洞穴ともいうべきものであった。……

「じゃ姉しゃん、行つて来つからな。行く所知んねべ？ マナベさんの奥さんと一緒に飯持つて来てけれな」

婆さんとお夏とは表の木扉のところに立つて見送つた。散々いやな思いをしあつた二人の女も、いまこうして立ち並んでいる姿は、年老いた姑とおとなしい嫁とにすぎなかつた。

さて、今からせい出して三人の弁当をこしらえてやらなくてはならない。出かけて行く彼等の後姿は、勝治と義三と孫市と、肩をならべて、まるでもう一人まえのお百姓であつた。お婆さんはその三つの後姿に満足しているらしく、少しばかり声に出して笑つた。しかしこの老女の柔らいた表情のうえに、喜びとも悲しみともつかない一筋のなみだが流れているのを、お夏は知つていた。

「孫さも、そのうち嫁コ探さねばなんねえなあ」

この老女はもうそんな先のことまで考へているのであつた。

いま引用した部分に明確に示されている、両作品に共通する心温まる情景描写は、両作家が用いた、早朝の風景

をいろいろる色彩表現のみずみずしさによるのではないだろうか。そしてこの色彩表現ないしは色彩感覚の著しい酷似は、いったいどこから来ているのであろうか、感慨無しとしないのである。

参考文献

- 石川達三。
『蒼氓』(一九三九)。石川達三作品集第一巻。東京・新潮社、一九七二。
『日陰の村』(一九三七)。石川達三作品集第一巻。同右。
『生きてゐる兵隊』(一九三八、一九四五)。石川達三作品集第一巻。同右。
『結婚の生懸』(一九三八)。石川達三作品集第二巻。同右。
『青春の蹉跌』(一九四三)。石川達三作品集第一五巻。同右。
『望みなぎに非ず』(一九四七)。石川達三作品集第三巻。同右。
『自分の穴の中で』(一九五五)。石川達三作品集第一巻。同右。
『人間の壁』(三巻)(一九五八―一九五九)。石川達三作品集第一一・一二巻。同右。
『経験的小説論・書齋の憂鬱』(一九七〇)。石川達三作品集第二五巻。東京・新潮社、一九七四。
『七人の的が居た』。東京・新潮社、一九八〇。
Steinbeck, John. *The Grapes of Wrath*. New York: The Viking Press, 1939.
———. *The Harvest Gypsies*. Ed. Charles Wollenberg. Berkeley: Heyday Books, 1988.
———. *The Harvest Gypsies: On the Road to The Grapes of Wrath*. Ed. Takahiko Sugiyama. 東京・研究社出版、一九九四。
———. *Their Blood Is Strong*. San Francisco: The Simon J. Lubin Society of California, 1938.
———. "Argument of Phalanx" (Two-page MSS., n. d., ca. 1935). Berkeley: The Bancroft Library, U. C. — Berkeley. (本資料は中山喜代市氏より借用した)。
ジョン・スタインベック。『怒りのぶどう』。中山喜代市訳(『スタインベック全集六』)。大坂・大坂教育図書、一九九七。

(小論中の『怒りのぶどう』の訳文はすべて中山訳によった)。

。『収獲するジブシー』。浅野敏夫＋杉山隆彦訳(スタインベック全集五)。大坂・大坂教育図書、二〇〇〇。

杉山隆彦。『アメリカ小説とモダニズム』(成城法字『教養論集』第一四号所収)。東京・成城大学、一九九八。

Benson, Jackson J. *The True Adventures of John Steinbeck, Writer*. New York: The Viking Press, 1984.

DeMott, Robert. Ed. *John Steinbeck: Working Days: The Journals of The Grapes of Wrath*. New York: The Viking Penguin Inc., 1989.

McWilliams, Carey. *Factories in the Field*. Boston: Little Brown, 1939.

後記

小論を書くきっかけとなったのは、一〇年ほど前に、何かの座談の折りに、文芸学部教授・塩川千尋氏が「怒りのぶどう」と『蒼氓』を較べてみたら面白いのではないかと私に語ってくれたことである。長いあいだ気にかかっていたので、まじめにしてみたのであるが、この度、河野護氏の成城大学教授定年退任記念の『教養論集』に執筆の機会を与えられたので、まじめに試みることにした。成功しているかどうかは覚束ないが、とりあえず、長年の畏友塩川氏と河野氏に対し、この場をかりてお礼を申し上げたい。

